
あいつからの「 | 遺書《てがみ》」

篠崎 両府

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつからの「遺書^{てがみ}」

【Nコード】

N4301BA

【作者名】

篠崎 両府

【あらすじ】

ある日突然、私のもとに思いがけない遺書^{てがみ}が届いた。大切な思い出とともに、彼の「告白」が時を隔てて届く。いままで気づけなかった、気付けなかった「あいつ」の本当の優しさ・・・一人の不器用で、臆病で、嘘つきだけれども、人を真に愛する強さを持った人間の生きた証がここに。

エピソード（前書き）

初めての作品です、学業との両立が難しいので、更新は不定期になりがちだと思いますが、いろんな方に読んでいただけたら幸いです。誤字脱字、文法の誤りなど、後学のためにもご指摘いただけるとうれしいです。

エピソード

「せんせい、さようならー!」「はい、また明日ね。」わたしは最後の園児を見送ると職員室に戻

り日誌をまとめ、ざっと戸締りを済ませると帰路についた。私の名前は花村りん、親しいひとは姓のかしら文字と下の名前とを合わせて「かりん」と呼ぶ。大学を卒業したのち子供の頃からの夢だった幼稚園の先生になれて、いまはじぶんでも驚くほど充実した毎日を送っている。職場から家までは自転車でおよそ十分程度でついた、投函箱をあけて適当にチラシと重要な郵便物を選び分けていると、ふと随分と覚えのある名前が目飛び込んできた、懐かしくて、それでいて記憶に鮮明で、そしてなにより暖かい「あいつ」の名前が・

エピソード（後書き）

訂正、及び感想お待ちしております。

〱 回想編 〱
? (前書き)

初めての作品です、学業との両立が難しいので、更新は不定期になりがちだと思いますが、いろんな方に読んでいただけたら幸いです。誤字脱字、文法の誤りなど、後学のためにもご指摘いただけるとうれしいです。

く回想編く？

「かりん、ひさしぶり。僕みたいな筆不精がこうやって手紙を君に送ったことに、少なからずおどろいていることと思います。僕はほんとに筆不精だから言いたいことをうまくこの手紙にかけたかどうか甚だ疑問だけど、めんどくさがらずに読んで欲しい・・・」ここまで読んで私は一つ息を付いた、さっき封筒を開いたときはその手紙の分厚さに驚いた、最初はきつと写真かなんかを同封しているからだろうと、その厚さも不自然とは思わなかったのだが、いざ開けてみるとそれは全て罫線と文字だけに埋め尽くされた紙の束だったのだ。手紙にもあったように「あいつ」は本当に筆不精だ、それは私もよく知っている。自分は今まで一度も年賀状を書いたことがない和不遜にも豪語した彼の顔を今でもふと思いついて頬が緩むことがある。そんな彼がこのような量の文章を綴ったこと、そして「あいつ」の柄にもない丁寧な筆致、いま思えば私はこの時から何かを予感していたのかもしれない。仕事の疲れと相まってその日は本格的に手紙に目を通すことを諦めて、寝ることにした。沐浴を終えて、ベッドに潜り込んだ私は強い眠気を感じていたにも関わらず、なかなか寝付くことができなかった、仕事の疲れと生来の寝つきの良さから自分でもそれが不思議だった。やはりさっきの手紙がじぶんは気になっているのかもしれない。かといってわざわざ起きて読む気にもなれず、私は「あいつ」と過ごした蜉蝣かげろうの生の如く短くも眩い日々を振り返り、思い出に浸ることで気を紛らわすことにした。

わたしが彼と出会ったのは、これといって特徴もない地元の公立高校での入学式だった。当時の私はほんとうにどこにでもいそうな地味な女の子だった。容姿、身体能力ともに平凡で、控えめな性格のくせにじつは頑固だということは自分でも自覚していた。あとは几帳面さと真面目さ、人当たりの良さが知人がわたしに持つ大まか

な印象だ。それに比べて「あいつ」は良くも悪くも目立った。朝礼のような人が並ぶ場面だと一層際立つ「あいつ」の健康的で色の深い黒髪、それとは対照的に混血児を思わせる色素の薄い虹彩と鋭めの輪郭。五官のバランスはもはや芸術的で、男とも女ともとれる中性的な顔立ちだが、洗練された無駄のない体つきは、はつきりと私に異性を感じさせるものだった。言うまでもなく、とても優れた容姿の持ち主だ。しかし、彼を目立たせている要素の最たるものは、その容姿ではなく雰囲気だろう。身長は170前後だが、猫背の姿勢が「あいつ」をそれより矮小に見せていた。そして極めつけなのは、その何人たりとも寄せ付けんとする表情だった。それはまるで天涯孤独な異邦人を想起させ、優れた容姿やほかの特徴のなによりも、わたしに「あいつ」を印象づけた。

〽回想編〽 ？（後書き）

訂正、及び感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301ba/>

あいつからの「 | 遺書《てがみ》」

2012年1月12日11時02分発行